

通し番号	3725
------	------

分類番号	12-2A-15-04
------	-------------

キウイフルーツの草生栽培のための草種選択試験	
<p>[要約]</p> <p>平棚栽培のキウイフルーツ園にナギナタガヤ（300g/10a）ヘアリーベッチ、サブクローバー（4kg/10a）ライ麦（1kg/10a）を9月中旬に播種し、翌年の8月まで成長及び被度を調査したところ、いずれの草種とも雑草抑制効果が認められた。ハルミドリは、梅雨時に自然枯死せずに草刈作業を要することから、省力化の面からは問題がある。豆科草種としては、ヘアリーベッチ、サブクローバー、イネ科草種としては、ナギナタガヤの草生栽培が省力的で雑草の抑制効果も高いことがわかった。</p>	
農業総合研究所・根府川試験場	連絡先 0465-29-0506

#### [背景・ねらい]

収量性、果実品質を現状維持させたなかで、環境保全型農業を推進するためには、生態系を活用し化学物質の投入量を最小限にする必要がある。本課題では、キウイフルーツについて、除草剤削減及び除草作業の省力化を目的とした草生栽培を確立するため、本県での草生栽培用の草種の選定を行った。

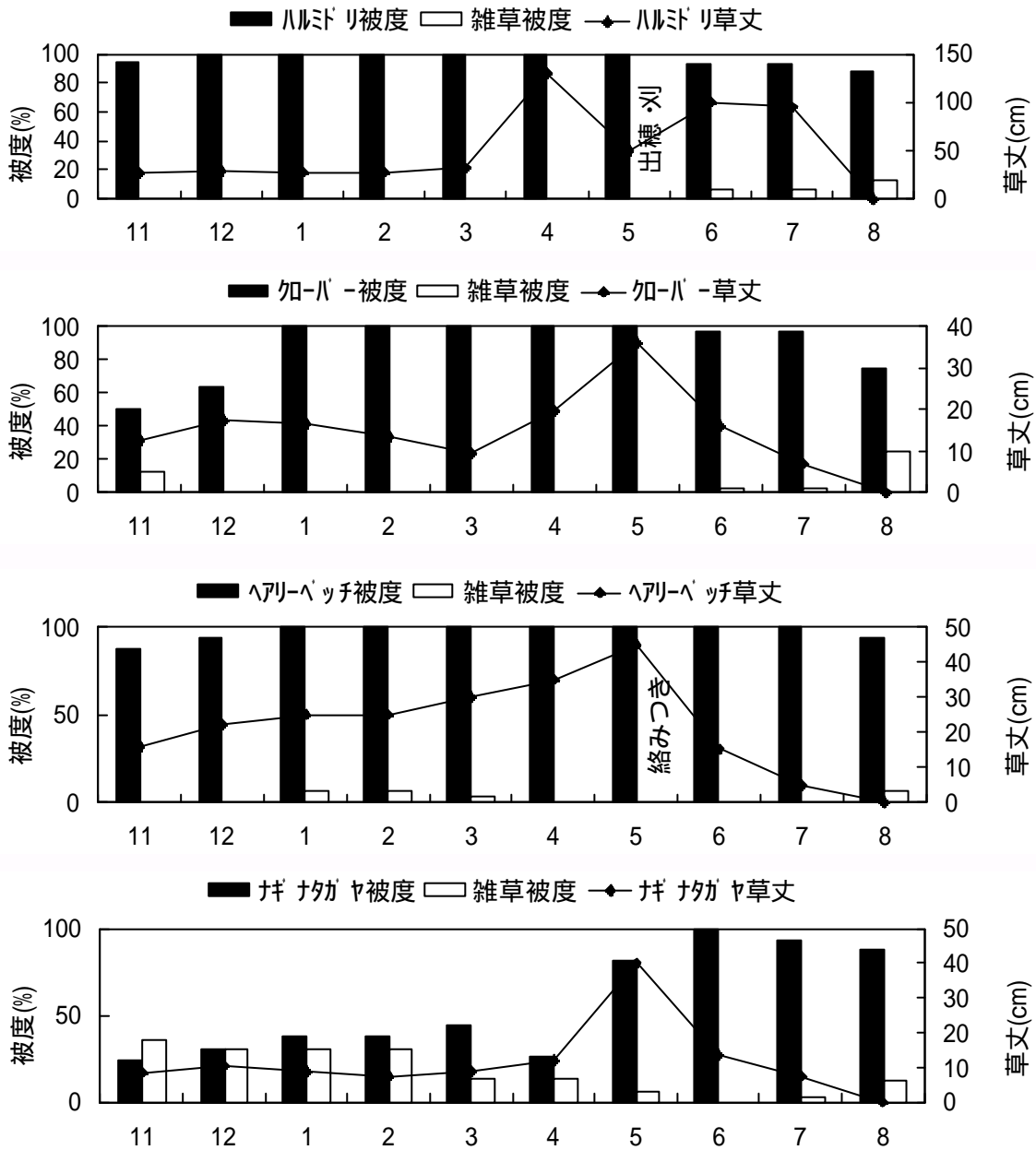
#### [成果の内容・特徴]

- 1 ナギナタガヤは300g/10a、ヘアリーベッチ、サブクローバーは4kg/10a、ライ麦は1kg/10aを9月中旬に播種し、翌年の8月まで成長及び被度を調査したところ、いずれの草種にも雑草抑制効果が認められた。
- 2 ハルミドリは、3月下旬から4月に1m程度に伸長して、春雑草を抑制し、5月以降は刈り倒して被覆することにより夏雑草を抑制した。  
ヘアリーベッチ、サブクローバーは、5月上旬まで成長し春雑草を抑制した。それ以降は自然に表層を被覆するように枯れこみ夏雑草を抑制した。ナギナタガヤも、4～5月にかけて伸長し春雑草を抑制し、5月中旬以降に自然に地際から倒伏し、表層を被覆するように枯れ、夏雑草を抑制した。
- 3 試験圃場は、除草剤及び草刈で除草処理を行ってきており、やや表土が固めであったことから、表層を5cm程度中耕後に播種した。播種後は、中耕した表土を軽くならし、覆土の代わりとした。なお、ナギナタガヤの種子は、60%<sub>W</sub>/10aの土と混合して播種した。
- 4 ハルミドリによる雑草抑制も他区同様、高い効果を示したが、他の草種と異なり、梅雨時に自然枯死しないため草刈作業を要し、省力化の面からは問題がある。
- 5 サブクローバー、ナギナタガヤは、樹幹周囲に施肥した部分では成長が著しいが、樹間の施肥を行っていない部分では、草の成長が悪く、枯死後の被覆が不十分であったことから、これらの部分からは、播種翌年の夏雑草の発生が一部見られた。
- 6 ヘアリーベッチもサブクローバー、ナギナタガヤ同様に、樹幹周囲の成長が著しいが、ヘアリーベッチは他の草種に比べツル状に伸長していくことから、成長の悪い部分まで十分被覆することができ、翌年の雑草も抑制した。
- 7 以上のことから、豆科草種としては、ヘアリーベッチ、サブクローバー、イネ科草種としては、ナギナタガヤの草生栽培が省力的で雑草の抑制効果も高いことがわかった。

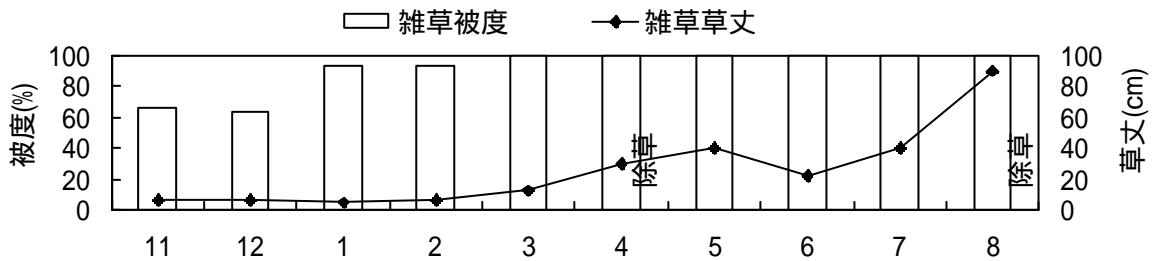
#### [成果の活用面・留意点]

- 1 ヘアリーベッチは、幹や棚の支柱等に絡みつく可能性があることから、もっとも繁茂する5月中旬に絡みつきを除去する必要がある。
- 2 ヘアリーベッチの場合、キウイフルーツの受粉時も繁茂しているため、他の草種に比べて歩きにくく、注意を要する。
- 3 ヘアリーベッチは、基本的に毎年播種する必要がある。サブクローバー、ナギナタガヤは、前年度生育した草からの種が発芽するが、これらの発芽程度が薄い部分に追い播きをする必要がある。このような処理で連年抑草効果があるかを確認する必要がある。

[具体的データ]



第1図 各草種の被度と生長



第2図 雑草草生区での被度と生長

[資料名]平成12年度試験研究成績書(カンキツ・キウイフルーツ)  
 [研究課題名]キウイフルーツでの草生栽培のための草種選択試験  
 [研究期間]平成12年度  
 [研究者担当名]浅田真一、鈴木 誠